

コロナ禍における子どもの「生活と発達」の危機と発達支援に関する国内外の動向(その1)

—子どもの食の困難を中心に—

○田部絢子

柴田真緒

高橋智

(金沢大学)

(埼玉県立所沢特別支援学校)

(日本大学)

KEY WORDS : 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)、食の困難、発達支援

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症 COVID-19 は、世界各国の子ども・若者にも大きな犠牲を強いている。子どもの生活基盤が安定せず、不安・ストレス等に伴う睡眠・生活リズムの乱れ、摂食困難、自傷、登校しぶり・不登校、感染不安と自主休校等の発達危機の高まりは国内外で報告されつつある。感染症の不安・恐怖、常に自粛・我慢を強いられる先行きの見えない生活の中での抑うつや孤独・孤立、一斉休校によるストレスや学校に行きづらいつと感じる子どもの増加、子どもの自殺者数の増加も示され、多様かつ非常に深刻な影響がすでに見られている (山野: 2021)。

本報告では子どもの食の困難を中心に、コロナ禍の子どもの「生活と発達」の危機についての国内外の研究を検討し、発達支援の課題を明らかにしていく。

2. 国内におけるコロナ禍の子どもの食の困難と発達支援

小・中学校及び特別支援学校等における臨時休業時の児童生徒の生活状況に関する調査では、臨時休業中に朝食を「毎日食べていた」小学 5 年生は 83.4%、小学 6 年生 79.3%、中学 2 年生 68.0% となり、同地域の前年度調査や文部科学省調査と比較して朝食の摂取率が大きく低下していた (土屋: 2021)。肥満傾向児出現率の増加がみられ、肥満の高度化あるいは標準体重から痩身傾向になった等、体格の二極化が進んだことが指摘されている。

日本摂食障害協会 (2021) の調査報告ではコロナ禍で症状が悪化するなど、摂食障害当事者の 93% が感染拡大の影響を感じていると回答している。小児科医からは初診の患者が感染拡大前の年に比べて約 2 倍に増えたという報告もあり、コロナ禍で深刻化する実態が浮き彫りになっている。

Reo Takaku ら (2021) は 4~10 歳児の母親を対象に調査し、5 分の 1 の母親は子育て方法について頻繁に心配していると指摘し、体重の増加と子育てに対する母親の不安の高まりの相関を明らかにした。

3. 国外におけるコロナ禍の子どもの食の困難と発達支援

ロックダウン等による学校閉鎖が生じた国々では学校給食が提供できない事態となり、子どもへの食事提供や栄養確保に大きな懸念があった。例えば、アメリカでは学校閉鎖中も子どもに食事を提供するために迅速な規則変更が行われ、給食を学校の駐車場や公民館等で配ったり、スクールバス路線に沿って提供する取り組みがされている (Eliza K.:2020,Erika M.:2020)。

ロックダウン中の子どもの退屈や親のストレスは食事や摂食行動に大きな影響を与え (Kaat Philippe : 2021)、イタリア・スペイン・チリ・コロンビア・ブラジルで行われた 820 人の子ども・若者を対象とした国際調査では、COVID-19 制限中に揚げ物と甘い食品の消費が大幅に増加したと報告されている (María Belén Ruiz-Roso et al. : 2020)。

子どもの肥満傾向の増加に関するデータも各国から報告されている。ドイツの子ども・家族の食事習慣と健康問題を調査した Berthold Koletzko ら (2021) は、パンデミック中の体重増加は 9% の子どもに見られ、親の学校教育歴が低い場合 (10 年以下) は 23% とはるかに高かった。さらに子どもの 38%、10 歳以上の子どもの約 60% に身体活動の減少が報告された。特に不安定な家庭において子どもの肥満率が増加し、健康格差が拡大す

る可能性がある (Boutaina Zemrani et al. : 2021)。

パンデミックやロックダウンは大きなストレスとなり、摂食障害患者の摂食行動の悪化やうつ症状・不安の高まりに関連する可能性が高い。実際、外出規制中において 41.9% の摂食障害患者に摂食制限、過度の運動、体重増加不安、体重増加等の ED 症状の再活性化がみられた (Montserrat Graell et al. : 2020)。

4. まとめ

COVID-19 パンデミックに伴い、国内外においては子どもの食・睡眠をはじめとする生活基盤の不安定、生活リズム障害、うつ等の心身の不調等に関して多数報告されはじめ、子どもの発達への即時的、長期的な影響が懸念されている。早期の実態解明と発達支援介入が急務である。特に社会的に脆弱なグループの子どもは、不十分な食事、学校教育と医療の欠如、社会的孤立、動画・インターネット依存等の困難を抱えているが、これらは生涯にわたる影響を及ぼす可能性があり、子どもの健康と発達の権利保障に関わる措置は喫緊の課題である。

【文献】

- Berthold Koletzko et al. (2021) Lifestyle and Body Weight Consequences of the COVID-19 Pandemic in Children: Increasing Disparity, "Annals of Nutrition Metabolism", pp.1-3, DOI:10.1159/000514186.
- Eliza W. Kinsey et al. (2020) School Closures During COVID-19: Opportunities for Innovation in Meal Service, "American Journal of Public Health" 110(11), pp.1635-1643.
- Erika G. Martin, Lucy C. Sorensen (2020) Protecting the Health of Vulnerable Children and Adolescents During COVID-19-Related K-12 School Closures in the US, "JAMA Health Forum" 2020;1(6):e200724.
- Kaat Philippe et al. (2021) Child eating behaviors, parental feeding practices and food shopping motivations during the COVID-19 lockdown in France: (How) did they change?, "Appetite", 161, 105132.
- María Belén Ruiz-Roso et al. (2020) Covid-19 Confinement and Changes of Adolescent's Dietary Trends in Italy, Spain, Chile, Colombia and Brazil, "Nutrients" 12(6), 1807.
- Montserrat Graell et al. (2020) Children and adolescents with eating disorders during COVID-19 confinement: Difficulties and future challenges, "European Eating Disorders Review" 28(6), pp.864-870.
- 日本摂食障害協会 (2021) 「調査報告書：新型コロナウイルス感染症が摂食障害に及ぼす影響」。
https://www.jafed.jp/pdf/covid-19/covid19_single.pdf
- Reo Takaku, Izumi Yokoyama (2021) What the COVID-19 school closure left in its wake: Evidence from a regression discontinuity analysis in Japan, "Journal of Public Economics", Volume 195, 104364.
- 土屋久美 (2021) 新型コロナウイルス感染症対策による小中学校臨時休業時における食生活に関するアンケート調査、『桜の聖母短期大学紀要』(45), pp.121-131。
(TABE Ayako, SHIBATA Mao, TAKAHASHI Satoru)